

会長法話



立正佼成会会長 庭野日鏡

◆心に香風が吹きわたる

日本の春の情景を美しく表現した歌の一つに、滝廉太郎作曲による「花」があります。「春のうららの……」で始まる、みなさんもよくご存じの歌です。その春の花の代表格は桜ですが、桜の花を見るよりも先に、梅や沈丁花や辛夷の甘い香りをのせた風に、春が訪れた喜びを実感する人も多いのではないのでしょうか。

その喜びにも通じる言葉が、法華経の「序品」にあります。

「梅檀の香風 衆の心を悦可す」——この一節を開祖さまは、「仏さまの香風が衆生の心の中に入ってくると大歡喜が生じる」と、簡潔に説明しています。

仏の教えに出会えた私たちは、その教えを聞き、学び、実践していくなかで、数々の気づきを得ます。いやだと思っていた人やものごとに感謝ができるようになったり、それまで幸せだと感じていたことは自己中心の思いにすぎなかったと気づいたりして、生き方が変わるのです。

そうしてほんとうに大切なことに気づき、悩みや苦しみから解き放たれた喜びを、私たちは「教えによって救われました」と、思わず口にします。それが、開祖さまのいう「大歡喜が生じる」でしょうし、そのときその人は「悦可」しているのです。ちなみに「悦」という字は、心のわだかまりをとり去る喜びを意味します。

私たちは、仏さまにお目にかかることはできません。ただ、たとえば本会の大聖堂などで、教えのなかに仏の慈悲を感じとり、その教えを実践することによって生きる喜びに目ざめた人の体験説法を聞くと、私たちもまた喜びを覚えます。それは、「梅檀の香風 衆の心を悦可す」の经文どおり、教えの尊さが胸中に吹きわたるからだと思います。釈尊がおられた時代もいまも、それは変わりがないのです。



◆みんな「徳のある人」

越後の良寛さんは、この「梅檀の香風 衆の心を悦可す」に学んだのでしょうか、「一生成香」（一生、香りを成す）を座右の銘にしたといわれます。「生涯、人の心をあたたかく包み、和ませ、悦びを与える香風のような人でありつづけよう」と思い定めて、そのとおりに生きたということです。

ただ、法句経に「徳のある人びとの香りは風に逆らっても進んでいく」「徳のある人はすべての方向に香る」とあるように、人の心を「悦可」するには徳分が必要という見方もできそうです。よく「私には徳がない」とか「あの人には徳がある」といったりしますが、修養や善行の積み重ねが「徳分」を身につける決め手なのかもしれません。

しかし、私は、そういうきれいなとも思うのです。私たちがいま、この世に一つの命を授かって生きているというのは、大自然の徳はもちろん、先祖や親の徳をいただいているからです。一人ひとりが、すでに豊かな徳を具えているということです。ですから、私たちは自らの「徳分」に気づけばいいだけです。気づいて、それを成長させれば、だれもが香風を運ぶ「徳のある人」になるのです。

そこで大切なのは、「有り難い」という気持ちです。なにごとにも感謝を忘れない素直で謙虚な人には、自然に人が引き寄せられます。そのうえで示す、明るく、やさしく、あたたかい態度や言葉は、持ち前の徳をいっそう香らせることでしょう。思いやりをもって和やかにふれあうそこに、教えの香しい風が吹きわたり、それが

釈尊の降誕月であるこの四月をもって、平成が改元されるといわれます。これは、平和を醸成する務めがマンネリに陥らないよう、心を新たに切り替える機会をいただいたものと、私は受けとめています。仏の教えという香風を運ぶ生き方が、いっそう大切になります。

（『佼成』2019年4月号）

